

10月2日(日) 15:30~17:00

ラウンドテーブル②

ニュー・マテリアリズムによる教育研究の可能性を探る

(22番教室)

企画者

楠見友輔 (日本学術振興会特別研究員)

提案者

桐山瞭子 (お茶の水女子大学附属中学校)

楠見友輔 (日本学術振興会特別研究員)

中島義和 (広島女学院大学)

藤枝真奈 (お茶の水女子大学附属小学校)

〈設定趣旨〉

近年、教育研究において、ニュー・マテリアリズムの考えを応用した授業研究の試みが見られるようになってきている。伝統的な社会科学研究は、人間／非人間、精神／身体、文化／自然、言説／物質という二元論を基盤としてきた。二元論に基づく思考は、理性的な人間に近づく単線的で規範的な学習の筋道や、授業を捉えるための焦点として人間の相互行為のみに注目する視点を暗黙的に肯定している。これに対して、ニュー・マテリアリズムは、出来事に影響を及ぼす原因となる力を主体性 (agency) と捉えることによって、伝統的な社会科学において人間のみが有すると考えられてきた主体性を非人間にまで拡張して考える。このような新しい思考の導入は、規範から外れていく変化を肯定的に捉えること、授業の計画や実践における物質の様々な可能性を考慮すること、授業の中で生じる予想外で創発的な瞬間を捉えることなどにおいて、旧来の教育実践や研究を問い直す可能性を有している。ただし、このような視点は国際的にも新しく、様々な教育実践を対象とした分析を通して、これから教育研究におけるニュー・マテリアリズムの意義を広く議論していくことが求められる。教育方法学会には、授業研究を専門とする研究者が多く所属し、学会紀要において授業研究は重要な位置を占めている。しかし、現在の授業研究は、人間同士の相互行為や教室談話に焦点が当てられることが殆どであり、物の主体性は十分に考慮されていない。企画者は、『教育方法学研究』第46巻に「ニュー・マテリアリズムによる教育研究の可能性」を掲載し、提案者を含む研究者、教師、学生らと、「ニュー・マテリアリズムによる教育研究ワークショップ」をオンライン開催してきた。本企画では、2名の教師の授業実践を物質と人間の対称性や、物の主体性に注目して分析することを通して、参加者とともにより教育実践や研究の新しい可能性についてオープンエンドに議論したい。